

お名前	性別	満年齢	終戦時の年齢	現住所
あさい としこ 浅井 寿子	女性	87歳 H27.8.15 現在	17歳	黒田

「海軍工廠 ～ 国民学校の子が犠牲に」

私は昭和20年（1945年）当時、豊川国民学校（現在の豊川小学校）で代用教員（準訓導）として2年生の担任をしていました。

8月7日の空襲の日、各教室の拡声器から一斉に「警戒警報発令！」と流れました。警報はラジオと直結してあり、すぐに避難できるようになっていました。それから程なくして「空襲警報発令！」に切り替わりました。空襲警報になると、子どもを帰宅させることになっていました。子どもたちは、直ちに通学班ごとに運動場に並びます。その日の私の担当は、豊川海軍共済病院の医師たちの子どもを引率することでした。共済病院は、工廠の正門のすぐ近くにありました。学校からは2km以上ありますが、子どもたちを連れて走り続けました。もう一人の女教師といっしょでしたが、とても不安でした。その頃は、名古屋や岡崎、豊橋、岡崎も空襲されていて、海軍工廠がある豊川はいつ空襲されておかしくないとうわさされていたからです。そして、その不安は的中してしまったのです。

子どもたちをお母さん方に渡し終えると、快晴の西の空から爆音をひびかせながらB29が10機ぐらいの編隊で近づいてくるのが見えました。ここへ爆弾を落とすのかと、血の気が引いていくのを感じました。学校へ戻ろう、逃げようとしても体が動きません。たちまち爆撃が始まり、すぐ近くに爆弾が何発か落ちました。一瞬の爆発と爆風で、辺りが何も見えない状態になりました。私は、もうここで死ぬんだと思いました。生きては帰れないと思いました。爆弾の地響きと土煙でもうもうとなつて何も見えず、方角さえ分からないほどでした。その時に私がいた場所は、正門から少し離れていましたが、何が何だか分からない状況でした。すぐ目の前を走っていく人たちが見え、私ともう一人の先生でその後をついて走りました。気がつくと牛久保駅の方角に走っていました。

海軍工廠の中へは、大変な数の爆弾が落とされました。「ヒューッ、ドッカーン！ヒューッ、ドッカーン！」と何度も何度も繰り返されました。真っ赤な炎が立ち上り、黒煙や土煙がもうもうとしていました。一度静まった



午後4時頃の正門付近の様子を描いた絵です
提供：桜ヶ丘ミュージアム

かと思うと、また次の編隊が来る、静まったらまた次の編隊が来るという繰り返しでした。その工場の中には、豊川国民学校高等科1年生の子どもたち50名がいるのです。

引率した海軍共済病院の職員の子どもたちは全員無事でした。しかし、豊川国民学校の生徒が7人亡くなりました。それも遺体が見つかったのは一人だけで、6名は遺体の確認さえできなかつたそうです。爆弾が破裂すると、爆風や破片によって建物は破壊され、人は著しく損傷されます。顔や耳も飛んでしまいます。足や腕、内臓も飛び散ってしまうのです。亡くなった子どもたちのことを思うと、どの子も笑顔が頭に浮かんできて、本当に辛くなりました。その高等科の子たちは、2年生の教室へ掃除を手伝いに来てくれていました。いつも明るい笑顔できちんとあいさつをし、一生懸命働く子たちでした。ですから、顔はよく知っていました。

当時は、高等科の1年生は海軍工場へ、2年生は金屋の軍需工場へ動員されていたのです。海軍工場は火工部に配属されていましたが、火工部は海軍工場の中心部にあって、爆撃が最も激しいところだったと聞きました。



当時の海軍工場正門付近

○ 貧しくとも人を気遣う子どもたち

当時の教え子たちには教えられることばかりでした。低学年のうちからろくな食べものもなく、がまんがまんて頑張っていました。「ほしがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」と教えられ、食べものも着るものも粗末なものでした。子どもたちは、お腹が空くと水を飲みに行っていました。弁当を見ると、家庭が垣間見ることが出来ます。

農家の子は麦のご飯でしたが、町中の配給の子どもたちはニワトリのエサのような弁当でした。学校の近くに銀行の支店長さんの子がいました。その子のお弁当は、お米の代わりに配給で、大豆ガスとトウモロコシ、雑穀のようなものが入っていました。今の牛や豚のエサよりお粗末なぐらいでした。米も麦も一粒も入っていないのです。でも、その弁当でさえ持ってこられない子がいました。弁当なしで来るのです。弁当の時間になると水を飲みに行くのです。それでもとても素直で、先生の言うことは神様のようにしっかり聞いてくれました。新米教師の私を気遣ってくれるような明るい子ばかりで、私は子どもたちに頭が下がりました。町の子どもたちは、本当によく我慢をし、悪いこともせず、愚痴一つこぼしませんでした。それでも、一人でいる時にポロポロ涙を流しているのを見かけると、本当にかわいそうになりました。亡くなった子どもたちも、そんな我慢強い

子たちばかりでした。8時から5時まで工員と同じように一生懸命働いていて、爆撃でなくなったんですから、どうにもかわいそうでした。まだ、12、3歳のあどけない子どもなんですよ。

○ 終戦直後の学校の混乱

敗戦で終戦になることはありえないと信じていましたから、天皇陛下の玉音放送があった時、よく聞き取れないこともあって職員室は大混乱でした。「最後の**一兵**まで戦うんだから、敗戦はあり得ない。」という先生もあれば、「陛下は共同宣言を確かに受諾された。」と主張する先生もいました。終戦の詔勅だとはっきり分かったのは、翌日になってからのことでした。

何ということでしょうか。大本營の発表はウソだったと分かったのです。翌日から戦後が始まりました。帝国主義に染まり、軍国教育の先頭に立った先生方もみえます。軍事教練を徹底して厳しく指導された先生もみえます。それが間違いだったと、どう説明すればよいのでしょうか。私は2年生の低学年でしたので、まだそれほどではありませんでしたが、5、6年生の先生方は本当に困っていました。戦争に負けたことは教えられますが、どうして負けたのか分からないからです。大本營発表だけが唯一の**情報**で、大敗した戦いでも敵を撃破したと発表していましたし、「本土決戦」「一億玉砕」と叫ばれていましたから、国民はみなその覚悟でいたのです。もちろん私もです。子どもたちから、「先生、なぜ戦争に負けたのですか。」「国民はだまされていたのですか。」と質問があったそうです。

そして9月になって学校が再開され、しばらくして教科書に墨をぬる作業をしたことを覚えています。戦争や軍国主義について書かれたところを塗るように指示しました。それまで一生懸命教えていたところを、急に消しなさいと言うのです。教育方法が正反対に変わり、一体それまでの教育は何だったのかと、悲しいような、むなしいような思いがこみ上げてきました。それまで熱心に軍国主義を教えていた先生ほど、その思いは強かったはずです。「非国民」と言われていた人が、実は正しかったというのと同じことじゃありませんか。私は家庭の事情もあって、12月で退職することにしました。

○ 子どもたちに伝えたいこと

国民は、すべて国が決めた方針には従わなくてはなりません。しかし、その国が間違いを犯すことだってあるのです。国の間違い、誤りを防ぐにはどうすればよいのでしょうか。それを考え、日本に戦争をさせないようにしてほしいのです。それができるのは、これから大人になるみなさんです。